

水野忠夫著

囚われのロシア文学

ソヴェト政権下の文芸活動



中公新書

823



中公新書 823

ソヴェト政権下の文芸活動

中央公論社刊

水野忠夫（みずの・ただお）

1937年（昭和12年），中国（旧満州）吉林市に生まれる。1961年，早稲田大学文学部露文科卒業。

現在，早稲田大学文学部教授。20世紀ロシア文学専攻。

著書『マヤコフスキイ・ノート』（中央公論社）

『ロシア・アヴァンギャルド』（バルコ出版）

『ロシア読書ノート』（南雲堂）

訳書 ショーロホフ『静かなドン』（中央公論社）

ブルガーコフ『巨匠とマルガリータ』（集英社）

マクシーモフ『検疫』（河出書房）ほか多数。

囚われのロシア文学

中公新書 823

© 1986年

検印廃止

昭和61年12月10日印刷

昭和61年12月20日発行

著 者 水野忠夫

発行者 嶋中鵬二

本文印刷 三晃印刷

表紙印刷 トープロ

製 本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋 2-8-7

振替東京 2-34

定価 520円

ISBN4-12-100823-5

囚われのロシア文学
目次

シニヤフスキイ・ダニエル裁判——序にかえて

3

入廷 起訴状朗読 尋問 「それはわたしの生涯
の使命なのです」 証人喚問・求刑 判決 反響

第一章 「雪どけ」への道

33

長い冬は終わったのか フルシチョフの「秘密報告」
へ社会主義リアリズムへの支配 ショーロホフの批判
「雪どけ」と「凍てつき」と

第二章 パステルナーク事件

48

音楽から詩へ 掲載拒否の手紙 ノーベル文学賞決
定 革命と戦争のなかの知識人 創造の目的

第三章 三世代の模索

63

哲学なき妥協 若い世代の登場 老作家たちの証言

「子」の世代の栄光と悲惨

第四章 モスクワのなかの悪魔

76

『イワン・デニーソヴィチの一日』 自己疎外の表現
政治のなかの個人 現代そのものを描く 自由化の
進行 「ろばの尻尾」論争 ショスタコーヴィチは
なぜ批判されたのか 抹殺されたロシア・アヴァンギ
ヤルド フルシチョフの限界 ブルガーコフの復権
政治の壁を乗り越える文学

第五章 ソルジェニーツインの告発

124

ブイコフの反論 「サミズダート」と「タミズダート」
トワルドフスキイの死 ソルジェニーツインの決意表
明 ソ連における「反体制」とは何か レーニンと
ロシア革命の追究

第六章 現代を問う作家たち

152

相次ぐ亡命　マクシーモフの文学　相対的な視点

宗教的問いかけ　「コンチネント」創刊　党と文学

の確執　「良心派」の試み　ロシア文学の伝統を継

ぐラスプーチン　マンデリシュタム夫妻の戦い

ヴォイノーヴィチの「兵士」

おわりに

197

囚われのロシア文学

——ソヴェト政権下の文芸活動

シニャフスキイ・ダニエル裁判——序にかえて

入 廷

一九六六年二月十日午前十時、モスクワ地方裁判所のなかの、傍聴席に百五十人も入れば満員になる小さな法廷で、ロシア共和国最高裁判所による二人の作家にたいする裁判が開かれた。

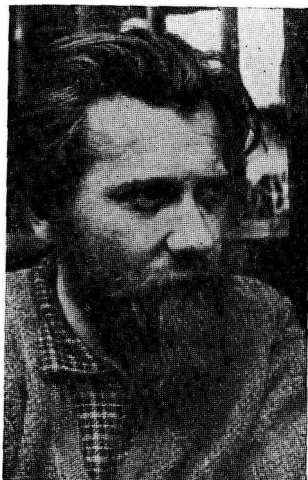
公開裁判とは名ばかりで、特別な許可を得て入場できた者は、建物の入口と法廷に通ずる階段のところで、二度にわたって身分証明書の提示を含めた厳重な検査を受けた。路上と中庭、裁判所の入口の周辺には、いたるところ、民警と裁判所の警備員が配置されている。法廷にはブラインドがおろされ、白昼でありながら電燈がともされ、ブラインドも壁も黄色い光を映していた。傍聴席は満員で、むし暑かった。

二人の被告が入廷する。昨年の九月十三日に逮捕されたアンドレイ・シニャフスキイとユーリ

イ・ダニエルである。二人ともいつもと変わりなく、五ヵ月にわたる勾留・審問にやつれた痕跡もほとんど見られなかった。やせて小柄なシニャフスキイは亜麻色の顎ひげを伸び放題にし、胸に切りこみのある黒いセーターの下に白いナイロンのワイシャツを着ている。その姿は、地中の宝物を守ると信じられた神話の侏儒、あるいは家の精を彷彿させた。ダニエルのほうは長身で、髪は黒く、強い意志を表わしているかのような大きな口、神経質そうな唇の持主で、その頭はいくぶん禿げあがり、チェックのシャツと着古したジャケットを着ている。被告にはそれぞれ護衛が付き添っている。検事と弁護士が入廷し、「全員、起立!」、「開廷!」と声がかかる。

地味な黒いスーツを着、眼鏡をかけた女性、やせたチェーチナを先頭に、ロシア最高裁判所長官スミルノフが、いつもの癖なのか、頭をやや傾けるようにして堂々と入廷し、四十歳ぐらいのスマートな美男子のソコロフがあとにつづく。チェーチナとソコロフは人民裁判委員である。三人が正面中央の所定の位置についたとき、スミルノフ判事は「着席!」と事務的に言う。

アンドレイ・シニャフスキイは一九二五年生まれ、モスクワ大学を卒業、文学博士候補の資格を得て母校で講師を勤めたあと、科学アカデミー世界文学研究所主任研究員となる。一九五九年からアレクサンドル・トワルドフスキイの編集する「新世界(ノーヴィ・ミール)」誌に六篇のエッセイを発表し、科学アカデミーより刊行された『ソヴェト文学史』の共同執筆者となり、『パステルナーク詩集』に卓越した巻頭論文を書き、メニシューチンとの共著『革命初期のロシア



アンドレイ・シニャフスキイ

起訴状朗読

まず、この二人にたいする起訴状が読みあげられた。

『詩』などをソ連国内で出版するなどして、才能豊かな実力ある文学研究者として注目される存在であった。いっぽう、ユーリイ・ダニエルもシニャフスキイと同じ一九二五年生まれで、義務教育修了後、兵士として独ソ戦に参加、重傷を負う。退役後、ハリコフ大学を経てモスクワ教育大学を卒業して中学校の教師となり、六年間、教職についたあと辞職して、詩と翻訳で生計を立てていた。逮捕当時までの二人の経歴とはこのようなものであった。

一九五六年から、被告アンドレイ・シニャフスキイとユーリイ・ダニエルがソヴェト国家と社会制度を非難する中傷的な作品を書き、非合法に国外に送っていた事実が確認された。五六年に、被告シニャフスキイはモスクワの自宅で元在ソ・フランス大使館付陸海軍武官の娘エレン・ザモイスカヤに原稿を渡し、

外国で発表するよう依頼した。被告ダニエルも、六〇年秋、国外で出版するため、シニャフスキイ宅で自作の原稿をザモイスカヤに手渡した。それ以後、シニャフスキイはアブラム・テルツのペンネームで『裁きははじまる』、『社会主義リアリズムとは何か』、『リュビーモフ』などの作品、ダニエルはニコライ・アルジャクのペンネームで、『手』、『こちらはモスクワです』、『ミナップの男』、『贖罪』などの作品を外国で発表しつづけたが、それらの作品は、近年、反共宣伝において重要な役割を演じている。

両被告は、これらの作品が反ソ的なものであることを否認したが、たとえば西側のジャーナリズムは、二十四カ国で翻訳された『裁きははじまる』を「ソヴェト体制にたいする完全な不満を、もっとも率直に、公然と表現したもの」として称讃し、シニャフスキイを「共産主義の不倶戴天の敵」と名づけている。『裁きははじまる』、『社会主義リアリズムとは何か』は共産主義イデオロギーとソヴェト社会のイデオロギー生活における共産党の指導的役割を否定し、ソヴェトの現実を誹謗するでっち上げを試みている。これらの敵意にみちた作品は、ブルジョア・イデオロギーによって反ソ宣伝に積極的に利用されるようになった。

「ドストエフスキイの精神的な後継者」といわれるダニエルの作品もまた、これと同様であった。これにはさらに新たな事実が積み重ねられている。

両被告は原稿のままでも周囲の人々に回覧させ、ひそかに敵たちに作品を送り、外国でロシア

語で出版し、ザモイスカヤを通じてその本を非合法に国内に持ちこんで普及させたのである。当然のことながら、その作品はソヴェト政権に敵対する態度を喚起するものであり、ソヴェト国民と国家の指導者たちに復讐しようとする公然たる呼びかけすら含むものであった。このような事実は、両被告の行動がロシア共和国刑法第一章第七〇条に照らして有罪であることをはっきりと物語っている。

ちなみに、刑法第一章というのは「国家犯罪」にあたり、第七〇条はつぎのようなものである。

第七〇条 反ソ煽動および宣伝

ソヴェト政権の破壊または弱体化、あるいは個々のとくに危険な国家犯罪の実行を目的として行なわれる煽動または宣伝、同上の目的をもってするソヴェトの国家および社会体制を誹謗する虚構事実の伝播、あるいは、同上の目的をもってする同上の内容の文献資料の頒布、作成または保管は、六ヵ月から七年までの期間の自由剝奪、または二年から五年までの期間の流刑をもって処罰される。

同じ行為がとくに危険な犯罪について、以前に処罰された者によりなされたとき、ならびに戦時中になされたときは、三年から十年までの期間の自由剝奪をもって処罰される。

尋問

起訴状の朗読のあと、被告にたいする尋問が開始された。

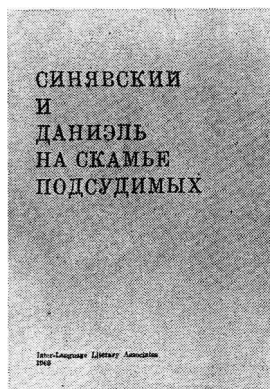
判事 被告シニャフスキイ、起訴状に照らして、全面的に、あるいは部分的に、自分を有罪と認めますか？

シニャフスキイ いいえ、全面的にも部分的にも、認めません。

判事 被告ダニエル、起訴状に照らして、全面的に、あるいは部分的に、自分を有罪と認めますか？

ダニエル いいえ、全面的にも部分的にも、認めません。

予審では、シニャフスキイとダニエルは自作にこめられているとされた反ソ宣伝の意図を否定しながらも、自分たちの作品がソヴェトにとって不利になるように利用されずにはいなかったこと、そして利用されてしまったことは認めていたが、法廷では、すべての罪を否認し、反ソ宣伝に利用されることを「望んではいなかったし、いまではそのことを悔んでいる」とくり返し述べたのである。



密かに国外に持ち出され、
ニューヨークで出版された
裁判記録

異例なことに、共産党機関紙「プラウダ」、政府機関紙「イズヴェスチヤ」、作家同盟機関紙「文学新聞」はこの裁判について報道し、被告が「うんざりするほどながながと」文学論を展開したと伝えているが、ソ連で刊行されている各紙の報道から裁判の全貌を知ることとはできない。その後、ソ連の国外でこの裁判記録が出版されたが、それによると、二人の被告は確かに「文学論」を展開することで自分の文学の意味を明らかにし、芸術的表現の自由を主張したのになんて、判事や検事および検事側の証人たちが、これを文学の問題として扱うのではなく、政治の論理によって裁こうとしていたのは特徴的であった。

たとえば、ダニエルの『こちらはモスクワです』をめぐる審理はどのように行なわれたか。

この作品では、一九六〇年八月十日の日曜日が、政府の布告によって「公然殺人デー」と設定される。この日にかぎって、年齢十六歳に達したすべてのソ連市民には、十六歳未満の小児、制服着用中の軍人と民警署員、職務遂行中の運輸機関員を除く誰をも自由に殺害する権利が与えられ、殺人をしても罪に問われることはない。モスクワ放送のラジオはこのように報道し、「イズヴェスチヤ」にも長文の「社説」が掲載される。最初のうち、人々はな

んのことだか理解できず、とまどうばかりであった。主人公は愛人のゾーヤから夫を殺してほしい、そうすれば二人は一緒に暮らしていける、と頼まれるが、それを断わる。人々は不安におびえつつ、「公然殺人デー」を迎える。しかし実際には、ほとんど流血の事態は起こらない、という物語である。

検事 予審の際、ガルブセンコは、これらの作品が宣伝の目的で敵に利用されるかもしれない、と被告に語ったと説明している。彼の警告にたいする被告の反応はいかなるものであったのでしょうか？

ダニエル 彼の言葉を見殺しました。わたしの関心は芸術的側面からの批評だったからです。検事 なぜ、被告は彼の言葉を無視したのです？

ダニエル なぜならば、わたしの作品に反ソ的な攻撃があるとはみなしていないからです。

検事 被告が自作のなかに反ソ的なものをなんら見ないとしたなら、この作品をソヴェトの出版所に持ちこまなかったのはなぜですか？

ダニエル きわめて尖鋭な主題をもったものを、わが国の編集部がなにひとつ活字にしないことを、わたしはよく知っています。わたしの作品には政治的な色彩があり、政治的な判断からしても、この作品は活字になるはずがありません。編集部や出版所の方針を、わたしは考慮した